

木曾街道膝栗毛

～ 前書き ～

『木曾街道膝栗毛』は、東海道中膝栗毛の弥次さんと喜多さんが、お伊勢参りを済ませた後、中山道を通して江戸へ帰るお話です。

作者の十返舎一九の代表作『膝栗毛』は、文化・文政期のベストセラーとなり、一九は、一躍流行作家となりました。

この作品の主人公である弥次郎兵衛と喜多八の愉快なコンビが繰り広げる、楽天的で無邪気な珍道中は、当時の庶民たちに歓迎され、長く愛読されつづけた作品になりました。

これに気をよくした一九は、『続膝栗毛』を執筆するため、その取材に信濃路へ草鞋を履き、各地を歴遊しました。

この時の紀行文は『滑稽旅賀羅寿』です。

その後『木曾街道膝栗毛』が執筆されました。

平成十八年十一月三日 発行

木曾街道膝栗毛 ～ 木曾十一宿の弥次喜多道中物語 ～

原作 十返舎一九

訳者 奥原修

長野県木曾郡木祖村小木曾在住

木曾街道膝栗毛(その二)

～落合宿より馬籠宿まで～

弥次さんと喜多さんは、山道をたどり、またなだらかな道を歩いて、ようやく落合の宿に着きました。

宿場入り口の棒鼻茶屋では、お茶酌みの女が、往来に行く旅人に声をかけています。

女「お休みなされ、お休みなされ。

煮しめのできたてもうありますよ。」

なあ、お入りなされ、お入りなされ。」

すると、茶屋に休んでいた籠かきも尋てきて、二人に声をかけました。

駕「旦那様、安く行きますよ。」

どじぞ駕籠にお乗りください。」

弥次さんと喜多さんは、首を振り振り言いました。

弥「いやいや、駕籠には乗り飽きた。乗る気はないよ。」

ど「どじぞも通り過ぎようかよな。」

駕籠かきは一人の後をひいて来て、

駕「そんな事を言わずと、乗っておくんなせよ。」

この宿場でお出たのも何かの縁です。

わしらが旅のお方を助けにやアいけません。

まあお聞きください。」

そのままで言いつつ、相棒の男が話を続けました。

駕「今、米が一升百文もする時代になってしまて、

みんなが働いています。

そんな折りもあり、

家の女房がこの間から下腹や腰が痛いと言いつつ

寝込んでしまいました。

わしも面白くもねえから、

ちよちよと一杯飲みたくなりました。

どじか、人助けと思つて駕籠に乗とくんなんよ。」

「お願いです。」

と、手を合わせて頼んでいきます。

「ここまで聞かせるなら、お人好しの喜多八は、ついその話に乗せられてしまいました。」

喜「いくらで乗せるかな」

駕「あてがいで、よむじせんよ。」

貴方の好いようにしてくださいよ」

喜「そっか、そっか。安くしてくれるんだね。」

弥次さん、お先に出かけて下さい。

おら、どっしりしたか足が少し怠けてきたので

乗せてもらおうよ」

と、「こ」で駕籠賃の話がまとまった喜多八は、駕に乗って出発しました。

先に行く弥次さんも、急な坂道を右へ曲がり、左に折れて、見え隠れに進んでいきます。

十曲峠は、急な坂道をいくつもいくつも曲がってとちていく先にあります。その急な坂道をいくつかが曲がるところに、大きなお寺の門と松の木が見えてきました。

寺の門の前では、「狐の膏薬」といつ看板を出して薬を売る店が目につきました。

この店の主人らしい人が、軒先で大声を張り上げていました。

主「あつあつお買いなすって下さいよ。」

「こ」の名物は狐の膏薬―旅の途中で足を痛くされたお方にはまさに「こ」よく効きますよ。」

ほかに、腫れもの・切り傷など何だて治してしまいます。

「この薬のすい出しは、めいぼし素晴らしいです。お金持ちの金銀はすべて「こ」から吸い寄せてしまえばいいです。」

また、貴方が好きな女の方なども、「この膏薬のひと塗りだけで、たびたと吸い寄せてしまっ程です。」

「やあ、お買いくだけれた。」

「こ」を駕籠の中で聞いていた喜多八は

喜「じゃあ、こいつはおもしねえ。

籠屋さんちまよと止まて下せよ。

もしも、その膏薬はわしの好きな女の人を吸い寄せてくれますか」

主「吸い寄せてくれますとも。

もしだめなら、膏薬紙へのばせずに、小判へのばして、

その女の方に貼り付けてやりなれ。」

喜「きぢがね。大方そんな事だろって思った」

こんな具合に、二人は楽しく進んでいきますと、石畳の道・立場茶屋・馬籠宿・そして峠の茶屋までやってきました。

峠の茶屋では、この土地の名物「栗の強飯」を口にして、その美味しさに舌鼓をうちました。

弥次さんは、早速一首吟じました。

渋皮のむけし女は見えねども

栗の強飯この名物

元気を取り戻した二人は妻籠の宿をめざして峠を下りて行きました。

(註)十返舎一九は、『続膝栗毛(木曾街道膝栗毛)』取材のため、信濃路各地を遊歴し、見聞や体験をまとめて上梓しました。これが『滑稽旅賀羅寿』です。

この中で「馬籠宿大黒屋前のいさかい」「立場茶屋の巡礼女」(大桑)、「枝付すりこ木」(寝覚の床)、「という痛快なお話がありますが、これは膝栗毛の二人が登場しません、別のお話ですので紹介だけにとどめます。

木曾街道膝栗毛(その二)

～馬籠峠から妻籠宿まで～

馬籠峠から妻籠の宿へ下る坂道にかかるよ、日はもう暮れかかりました。
た。

坂道を下っていきますよと男滝・女滝」といふ名所にせいかかりました。

ここを通りかかると、二筋の滝が落ちる音が「つ」と響いていました。

二筋の滝の中にて格別に

大く見ゆるは男滝なるべし

こんな歌を詠みながら下つていくよ、

宿引きらしい男が「つ」と二人に話しかけました。

男「もしもし、貴方がたは妻籠へお泊まりだろ。

いい宿屋がありますよ、」

弥「いや、おちらは定宿があります、」

男「そりゃ、何屋ぞや、」

喜「何屋だろうと貴様の知った事じゃねえ。

「うちぢつておいてくんない、」

男「いや、わしは今日籤(くじ)に当たって、

客引きに来やした。

定宿のねえお方はオラの家へ連れ行く、」

弥「途方もねえ。宿はうちのもの。銭はうちのもの。

銭で宿を決めるのはこちら様じゃ。

貴様の所へ是非泊まらなきゃならねえ訳もあるめえ。

第一、貴様のところがどんな化け物屋敷か、

昨日あたり首吊りのあた家かわかりやしねえ、」

男「なにこく。いつオラの家で首吊りがあった、」

喜「アハハハハ。そんなことわかるもんか。

「このくちたねめが、」

男「なに、このじまのはつ、」

宿引きがつかみかかるのを、弥次郎兵衛と喜多八は突き倒して、おもつ

ちまきくらしわねや、宿引きはほしほしの態で逃げこきました。さて、宿引きを追い扱った一人が妻籠宿へ急ぐ途中で、三人連れの巡礼尼たちに追いつきました。

年は、十七、八から二十三、四歳くらいまでで、疲れた足を引きずり、杖にすがって歩いていきます。

弥「ねえ、尼さんたち、お国はどこだ？」

尼「アイ、私どもは奥州でござんす。西国修行の帰り、一行に病人が出て難儀しております。」

喜「そんなら、俺たちと一緒に宿に泊まらねえか？」

尼「ナンノ、私たちは路銭を使い果たし、道々情ある人のご芳志で、よつやく木賃宿に泊まりを重ねております。とても旦那様方のような立派な宿には泊まれません。今日も馬籠の宿で餅を一つ一つ買って食、たまんまだなまっ！」

と、言ひながら涙ぐむ有様です。

聞いていた弥次郎兵衛は、女に甘いので思わずもろ泣きこそのこになりました。

弥「ポン、かわいそつだ。女ばかりで銭がなくちゃあ、

そぞ心細かるつ。腹がぐちゃあ旅もできぬえ。」

「いれど何ぞ買つがよい。ポン！」

銭二百文ばかりやるつ、尼達はおしいただいてありがとうございました。

弥次郎兵衛は「まずは良い功德をしたわい」と上機嫌で歩いていきます。た。

つぼらへ行くと、上方者らしい三人連れと一緒にになりました。

三人は笑いながら話しかけました。

三人「お前さん方旅は初めてかいな？」

弥「はいっつ、」

三人「今のおなじ共の言ことほんまに思つていやはるか。あやあ決まりの比丘尼でねん。わぢとあわねぼいなりで、甘い顔の男にたかるのだわな。」

弥次さんは、苦い顔をしましたが、すべりまわってしまふのがこつやうで

す。

二人は、上方者と一緒に黒股屋といつ旅籠へ泊まる事になりました。さて、一風呂浴びた五人が酒を飲んでいると、下女が「お酒の相手はいらんかいな」と勧めに来ました。

お酒の相手は、お客にお酌さんが一人ずつ付くのだそうです。

「しばらくして、宿の女将が出てきて言いました。

女「お客さん方、今日は」のお祭りでお酌さんが出揃っていて四人しかいません。

一人、お寺の方を入れてはどうでしょうか」

弥「ひとり比丘尼を混ぜようってんだな。

それもよからう。これは面白くなるぞ」

喜「どうやって相手を選んだらよからう」

女「行灯を消して、暗闇の中で」

一人ずつおとらまえていのはどうでしょう」

弥「なるほど、そりゃ面白」

やがて真暗闇の中で引張り争たり、何かにつまずいてひくりかゝたりして、大騒ぎの末、お酌さんが決まって静かになりました。

そのとき、お勝手の方で酔っぱらいの大声。

「じいちゃん宿の亭主が帰ってきたらしい様子です

すると、続いて女将さんのこれも大声。

女「ええ。どうで今まで飲みくすた。見たくもない」

亭「まあ聞いてくれ。今日籤(くじ)に当たって客引きに出たまでは良かった。

それで客を引張りずと思たら、江戸者二人が図太いこと言いやがったで。トタマひばたいてやらすしたら、二人がかりでたいそうに俺をどやしつけやがた」

女「バア、今晚家に泊まる五人のうち二人は江戸者だな。もしかして、

その二人じゃないかい」

亭「ち、じゃその一人は色黒のドンダリだな」。

横小ビンのはげた男じゃないかい」

女「そこそこ」

亭「もう一人はスタ袋をぶくらしましたよつなさんで

鼻の平たいヤツだろたずら」

女「そこそこ」

亭「そこそこだ。畜生め」

宿の亭主は肌脱ぎになり、大声上げるのを女将が懸命に引き留める。

「この騒ぎに喜多八も聞き耳を立てていたが、気の短い江戸子だから我慢ができません。」

喜「なんだ。いけそこそこして。黙って聞いていねばいい気になりやがて、

スタ袋とはなんだ。この山猿め」

亭「なにこく、この喜多八はめ」

「ここ、亭主と喜多八の二人は激しいとくみあいになって収まる気配もありません。」

女将や下女や上方者が中に入りようやく仲直りさせた頃、はや夜が明けかかりました。

女「あなた様もおやかましくいきました。」

もつ夜が明けました」

女「今、お膳をあげまよ」

女将がそう言うて引き下がる、皆一様に気の抜けたよつな表情です。

後になってわかつた事ですが、お酌に来てくれた女性は五人が五人とも比丘尼だつたよつなです、その内の三人は、峠の下り道で出合った巡礼女だつたよつなです。

どいへんに紛れて、ちよと身を隠したよつなです。

酒の相手をしなかつたとか、比丘尼だけだたじやないかと言ひ出してはみましたが、女将はしらばくれて取り合わないので、仕方なしに金を扨て旅籠を立ち去るしか仕方ありませんでした。

宿を出るとき、弥次さんは悔しまわたり一首やらかきました。

五人迄比丘尼は出せや

頭から毛もない顔の女憎らして

木曾街道膝栗毛(その二)

〜野尻宿の茶屋において〜

かくして、弥次さんと喜多さんは、妻籠から二殿を通して、早くも野尻の宿まで来て来ました。

道に行く旅人がおもしろい節回しで歌を歌いながら歩いているのに出会いました。

しくしく泣いているその顔見れば

あなたは諏訪の針箱背負って

「ねからでい」がへお出かけかい

きれいな姉さん見てごらん

「のわしだうて悲しごよ

ちよと休んでいぢらんかい

歌をじつと聴いていたのは茶屋のお茶酌女たちでした。

でも、「ん」と我に返ると弥次さん喜多さんに向かて声をかけました。

女「はい、じつはお休みなおります。

おこかけの煮たのがございますよ。おこかけですよ」

喜おこかけで、なんだ？」

女「お蕎麦の煮たのどうですか？」

すると、弥次さんは

弥「ババアそっか。蕎麦だたのが。

おこかけでいつから小栗殿の馬を食わせるのかと思たよ。ハハ

ハ

と、笑い出しました。

喜多さんもしささか草臥れた様子で「休んで行きやしょう」と言いつつ、自分からささか茶屋へ入っていききました。

茶屋は賑わっていました。

喜多さんが腰を下ろした時、頭に烏帽子をつけ、白装束で背中に箱を背負った男が立ち上がりました。

そして、威勢良く鈴を鳴らして往來を行き来する人々に大声で呼びか

けました。

男 お聞き下され。わたしは阪東常陸の国(茨城県)鹿島大神宮の事
ぶねびいすね。ハケン」

弥次さんは「うしほもまつらむら」うしと手を叩きました。

男も得意そうじゃ。

男 さて、鹿島様の一年間の「ご神事は、七十二度のお祈り式と七度
のお祭りが「せしませぬ。

また、湯試しの「ご神事と申しまして今年の作物の占いが「せしま
する。

今年は、日照りが六分、雨が四分、風が三分の割合ですぞ。大
豆や小豆の出来は六分五厘だし、粟と「上の出来は七分で大分
よしの、菜や大根は半分の出来と「占いに出来ました。

稲の方は八分五厘の出来で「せしますぞ。

世は凜々と七年もの間豊年が続くから「お喜びあれど「託宣があ
りました。

でも、良い「よと「しものはそんなに重なるはくれません。今年
皆さんには七分の祟りが有りとの「託宣もあるやうです。

また、東南に出る星の光を受けると「疱瘡や麻疹にかかって命が危
い「よと「託宣です。

鹿島様は、「これらの災難をお救い下さる有難い神様で「せします。
皆さん「ごかお札を求めてから「お祈り下さい。

あね、「ごまで申しているうちに人がみな散ってしまたわい。ごり
やあ「ごしした。

仕方がない、まず「服や「ごしよつか。

は、「いめんなすぞ。」

男は「一気にそれだけまくしたてるぞ、弥次さんのそばへ腰掛けました。

茶屋の婆さんが「お茶を「ごしよ、すすめると、男も賣いで話を始めまし
た。

男「ばあさま、きち「はあ天気良くて「ごのし」

婆「いや、「の頃雨で「ホウの根は腐るぞ、

麦は芽がはえたまんまのびてくれません。

とんだ年もあったもので」「そんなさ、」

男「心配しなさんな。

さきも申した通り、「託言で今年は豊年で」「そんなさ、」

「」で弥次さんも口をはさみました。

弥「お前さん、鹿島神宮からだして言ったね。

とんだ遠くまで来たさるねえ、」

男「私どもは、と」「と」「事ごと」「おんごよ。

貴方がたはお江戸の衆だな、」

弥「そつね。もし、今年その悪い星に当たるといふは、

俺の事ではあるまいね、」

男「どつかな。そりゃネズミ年の人とウマ年の人、

トウジ・サル年の人がその星に当たるとい、

びびく悪い年に当たるといふよ、」

弥「そんなら、わしはトリ年だからその難はないのだね、」

男「ないもね。」「と」「あんたはびびく運の良い人だからね、」

弥「そつかね。それで安心しました、」

男は、弥次さんの顔をジロジロ見ていましたが、

男「ぼはあ、今年から六十歳までは幸せで」「そんなさ、」

七年後には、あなたも病気で腰が立たなくなってしまうぞ、」

弥「「うりあ不思議だ。先のことなんかわかるのかえ、」

男「でも心配はいりません。貴方は運の強いお方だから。

「」心配ならば、私がお被いしてあげましょ、」

「」しても特別お金を戴くといふ訳では」「そんなさ、」

と、男は懐からチリ紙で作った形代と小さな御守りを弥次さんに持たせました。

弥「あ、「うりや何ですか、」

男「」の形代で体中をなでまわして川へ流しなれど、

また、御守り札は肌から離さないようにしてよくお祈りをしなれど、

い。

と」で、貴方のお名前は何と」のですか」

弥「わ、あ、江戸神田八丁堀とちめん屋弥次郎兵衛と申しやす」

男では、常陸の国へ戻って、もう一度お祈りし、

江戸の貴方にお札を送ってあげましょ」

弥「有り難うございます。」

いろいろお世話になりますから、お金を包みましょ」か」

男「お気持ちがおありなら銅」二百文をお包みください」

弥「なに、それだけのことは致しましょ」。

今もって私はどしつかするよ、お酒でもたんと飲んだ時など舌が回らななたり、歩けなくなつて困る」ことがあるので、そんな病気が出ないよう」にお頼み致します。」

と」二百文のお金を包んで差し出さしするよ、喜多八は弥次さんの着物を引張つてやるな」よ」の思ひをこました。

でも、弥次さんはまるで意」介をな」よ」の様子でお金を渡してしましました。

お金をもらった男は

男「心配する」よ」は、おせうまかせ。」

」のお代を戴いたからには、貴方の身に降りかかる災難の魔除けを必ずしてあげましょ」。

」じゃ、婆をまぜ、お世話になりました。」

と」茶代四文をそ」よ」置くよ」をよ」出してまました。

今までの」よ」を」よ」思つた喜多八は、

喜「ハハハハ、お前さんら」よ」もな。」

何でもないお金を二百文もただ取られてしまた」よ」ないか」

と」らつて笑いました。するよ」弥次さんは

弥「そ」よ」言ひなよ」。

あ」よ」の」よ」を」よ」ま」よ」言ひ当つたんだから。」

あの着の言ひ」よ」は、嘘」よ」あ」よ」。

喜多八は、もうこれ以上弥次さんをからか」よ」のをやめ」よ」する事」よ」してま

木曾街道膝栗毛(その四)

〜野尻宿から須原宿まで〜

二人は、茶屋を出て宿場の中程まで来て来ました。

弥「喜多さんや、退屈だね。」

紛らわせに、「これから一日代わり」

旦那と家来になって歩くというのはどうでしょう」

喜「そりゃ面白そうじゃないか。」

弥「そうと決たら、今からまず俺が旦那だ。

てめえ、この風呂敷包みを、

お前の分と一緒にかりいで来るがいい」

喜「どうも」

弥「どうもではならん。へいへいと言っただ」

喜「へいへい」

弥「まあ、旦那だぞ。こりゃ喜多八、今日は好い日和だな」

喜「お楽しみでございませう。」

と、いよいよ具合ロ、二人は代わる代わる言葉を交わしながら野尻宿のはずれまで来て来ました。

すると、馬を引いた馬子が声をかけました。

馬「旦那旦那、ちょうど須原の宿への帰り馬です。」

乗っ掛けておくんなせえ」

弥「おう、安くしてくれれば乗りますよ」

馬「安く値切るまでぞ。」

須原まで来たの百文ですよ。

あそこ」に居られるお侍様も、

今、これから仲間の馬に乗って下される事になりました」

弥「こりゃ喜多八。予は馬に乗るぞ。」

その包みを馬に付けよ」

喜「はいはい。かしこまりました」

弥「これ馬子、早く馬の用意を致せ」

馬はいます。やまいずれもさせません。

旦那、「この馬はゾヤゾヤ馬だから、
気をつけて乗らせるといいな」

弥「わしらは裸馬に乗るとしてすら平気だから、

こんな痩せ馬なんて何でもねえ。

こんな馬どっせろくな物を食わせてねえじゃねえかい」

馬それでも危ねえから、「この上から乗らせよう」

と、馬士は茶屋の前にあつた床几を引き寄せ、その上から乗らせようとしてしまつた。

弥次さんが「よいいらしよ」と乗らしてした時、向うから面白い歌を歌いながら来る女達を通り過ぎようとしてしまつた。

歌「七つ八つから手習いすねん」

切れる氣の字は習いはせぬとひ」

喜多さんは、すぐに大声を上げて囃し立てたので、弥次さんもいい浮かれて声をかけようとしてしまつた。

その上、女の人達に見られているから、声をかけざるま格好良く馬に跳び乗らしてしたからたまりません。

床几は片方に力が加わつたので、跳ねるようになつてしまつた。

弥次さんは、床几の先になつて地面へ仰向けに叩き付けられてしまつてしまつた。

弥「アイタタタタ」

弥次さんは、地面に倒れたまま立ち上がれません。

顔をしかめて「おぼがらじよ」。

馬士は、あわてて弥次さんの体を抱き起してしまつた。

馬「ヤヤヤ、これは、これは」

どうぞお怪我なすたかね。危ないことだ。」

弥「ぐるぐるの所がギクリとなつて、アイタイ」。

アイタイ」

喜「ハハハハ。さき鹿島神宮のおふれでは、運の強い人といつて託宣。

そんな怪我をする者が何で運の強い人なんて言えようぞ」。

「二百文をただで取られた大きな鼻垂らし小僧じゃねえか」
 弥「やい、おのれ、忘れたな。」

「この旦那様を鼻垂らしとは大えヤツだ」
 喜「ハハハハ、本当にそうだけ」

馬「今、お話を聞いていりゃあ、あの野尻の怠け者に旦那方は乗せられたよこひりぎんすな。」

「ありゃあ、泥畑の賀藏とてこへでなこなとせよ」

弥「なら、ありゃほんと鹿島のおふねじゃなもたのか」

馬「どのでもせえ。」

鹿島様とは野尻の鹿島神社をもじってみかけたのだ。

あいつの考えそうならうた」

喜「それみたじか。ばかばかじか」

弥「仕方かねえ。」

「これも回落とじたて思てはまきめなつかた」

弥次さんは、騙されて、「二百文をゆすり取られたあげく、足をぐごしてちとせとせよ。ヤハせへのヤジで馬に乗じまじた。」

「いんが、この馬も足をいしが痛めたのがびいをひこせよと歩き出す有様です。」

弥「足を怪我したこえ、この馬からまた落とされたらやり切れねえ。」

「これ馬子、馬が転ばぬように気をつけて引いてくれ」

馬「ええ、転んだらまた起してしまひん」

弥「起すなとせこれたじかだ。お前も居眠りしながら引くからとせんなこいじが言えぬのだ」

馬「難しいお方だな。落ちたらまた乗ってくださいせよ」

弥「この馬はめ。」

「この馬を転ばすと、お前の首が飛ぶからとせし思え」

馬「あ、馬が転んだらウシの首が飛びますか」

弥「じれたじかだ。覚悟して馬を引くが好い」

馬「あ、そうですか。ごやあ」

弥「ち、ちよひ」

馬士は、野尻の宿のはずれまで来ると、馬のたすなを離してどうにか入駆け
て行ってしまった。

つばらへするよ、長い刀を差して戻て来ました。

弥「何だお前、俺にかなわねえと思て刀を差して来あがたな」

馬「アイ。わしも命がけだ。」

お前が転ぶとわしの首がないと言われた。

それほどの事を言わしやるなら、馬が転ばずに行けば、旦那の首
が飛ぶからと思いがいい」

弥「やい、馬士のくせして面倒な事を言いつわい」

馬「じんだもはねたまじらんわい。」

わしもこの宿場じゃ不精者だ。

ひねる事にかけては、むだいかない男だ。

あつともない。」

弥「気の強ええ事ぬかしやがる。」

そりゃいだが、もともと早く馬を歩かせる事おぼえねえのが」

馬「早くせると馬が転ぶから、俺の首が無くなる。」

だからそりそりそりせしやせしやい」

と、驥でも這いよついで、馬をゆるゆるとこゆるゆるとこゆるゆると歩かせ、
われませぬ。

だから、馬上の弥次さんは、トライアして通ります。

喜多丸は、二人の後を歩きながら、

喜「ハハハハ。こいつは馬士殿の方が一枚上手だぜ。」

須原の宿まで一里半。

晩までかかってもいいからちておくれよ。ハハハハ。」

弥「ええ。喜多丸さまでもそんな事を言いつは思々です。こへん口
が長いといふまで、こわいも埒があかないよ。」

早くせしはくわいよ」

馬「早くせると足の速い馬のしだ。必ず転ぶ。」

転んじや俺の命はない。早くなんか行かないよ」

弥「おい、喜多丸さま。お前乗らねえが。」

俺はもう飽きた。もう降りる」

喜「なになに、旦那様を歩かせて、家来の私がどっして馬になぞ乗らねまよう。」「もたないわい」

弥「えい、とんだめにあつ。

転んだって何したって許してやるつ。

しゃんしゃんやね。早くちておくれ」

馬「おいおい、怪我をさせてもよけりゃ早くちりやせよう」

と、言たかと思つて、手づなを持って馬の尻をやらたらふたふたと叩き、綱を離れたからたまりません。

驚いた馬は猛たよつと駆け出しました。

弥次さんは、馬の鞍にしかりとつかまりながら、

弥「おいおい、そつと言えは止まてしまつて、ぐわと申すと余りに

早すぎて尻が驚いて痛いやう。

もつ静かにどきどきのが」

と、言つので、馬士はまたどっぴわんそつとそつと歩きました。

喜「やん、また、吹き出つてしまつた。

そつとしながら、まよひやへのどつで須原の宿へ着くと、馬士は棒鼻の茶屋の女將に長い刀を渡しながら言いました。

馬「じのかか様。

どっかけの騎さまに頼まれた刀を、持ってきましたよ」

喜「旦那の首を取るつと差してきたのじゃなかつたのか。

ワハハハハ。またまた馬士殿に一本取られましたな」

と、笑つので、さすがの弥次さんも笑い出してしまいました。

木曾街道膝栗毛(その五)

〜小野の滝から上松の宿まで〜

須原の宿へ着くと、二人は棒鼻の茶屋にゐて休みました。弥次さんに乗せた馬を引いていた馬士の脇差が、客の首を取ることにしたのでなく、野尻からの預かり物とわかつて、喜多さんは大笑いをしました。

弥次さんはいままじい表情をするよ、

弥「えい、業腹な。ウネッ覚えてけっかね」

と、捨てゼリフをはき、馬士をにらみつけながら、プイッと茶屋を飛び出してしまいました。

喜多さんも笑いながら後を追いかけて、

次の宿を目指して歩き出しました。

ほどなく、大野荻原をすち過ぎ、

小野の滝という所へさしかかりました。

落ちかかり岩をもぶさく勢いは

山賤のもつ小野の滝なれ

歌を詠みつつ暫く行くと寢覚の立場に着きました。

ここは蕎麦切り(蕎麦をゆって食べさせる)じが

名物になっています。

立場茶屋の中では「越前屋」の娘さんが

若くて美しいという評判がなっていました。

名物の蕎麦切りよりも旅人は

娘に鼻毛のばし休らむ

また、ここは臨川寺という景地があり

「寢覚ノ床」というのは寺の境内近くだそうです。

寢覚ノ床では、

昔浦島太郎が釣りをしたという言い伝えがあります。

浦島もかかる景色の寢覚には

小便よりも釣りや垂ねけん

歌を詠んだり、景色を見ながらお茶を戴いていって、
 すき野尻の宿で一緒に馬を頼んだ侍の歩いていってものに追いつき、後先に
 なりながら話を始めました。

弥「旦那の足は速いですね。お一人ですか」

侍「おらあ国を出るときは二人組で出てきたのだが、大阪屋敷に連れ
 の人が残り、それからずっと一人旅という訳で」

喜「お国はどの国ですか」

侍「奥州です」

弥「お一人では」

侍「情けないもそれ。ヒキヤのこもりもいり」

「でお主達は江戸のお方かな」

弥「はい」

侍「おらも江戸へ出てきて暫くになるが、だいぶ賑やかな所だなもし。
 今でも芝居なんぞあつていなかな、もっ」

弥「近年芝居は大流行でね。盛んなもんです」

侍「その芝居屋さんのあつては何ところ所であつたかな」

喜「あつて町かえ」

侍「いや、何て言う町だつたかな」

「御屋根屋町て言つたかな」

喜「御屋根屋町なんつて町はあつてはせんぜ」

「ははあ、茸屋町かね」

侍「それぞれ、その茸屋町の市村羽左衛門の芝居屋」

「そこへ同役仲間で見物に行き申した事があつて」

「それが初めての芝居見物です」

「あつてものは武士の見るものでは」

「業が湧き申すわ」

弥「なぜですか」

侍「沢村宗十郎とかいつ役者どもが侍役になつて、だいぶ見栄よく振
 る舞っていたんだが、そのうちに悪人役の何とかが言つて出てきて
 口喧嘩をはじめた。すなわちした訳かその侍が頭を下げて謝り

だしたじゃないか。

その話は、さらに侍が悪人役に頭を打ち据えられるようにねむねとウソをついてます。

身どもは、それを見ると業が煮えて煮えて耐えられない。こいつは、
 栈敷を飛び出して怒鳴った。

「コヤコヤいかに芝居狂言だとしても、もう、ぬくい話じゃないか。
 宗十郎は侍だ。侍が頭を下げて謝るのにまだ許せなくて、拳げ
 句の果ては頭に手をかけた。

侍の頭を打つとは何事だ。侍は相手互いである。

これから宗十郎の肩は身どもが持つからとっと思え。

さあ、そんな悪人ども失せおれ、失せおれ。

身どもが相手になるべし。そこからでもかかって来やがれ。と、身
 構える。おいらの勢いにのまれたか、その悪人どもは口ほどにも
 なじやん。

「ボウほどのしほをまがいて楽屋の中へ逃げこいてしまった。それ以
 来、身どもは国までも芝居なるとしてものは見たことがない。

見ると、肝がふつとよみがえる」

喜侍さん、芝居は芝居。芝居の中の話と混同しちゃ、役者さん達が

可愛らしいですよ」

侍「。」

弥でも、侍さんなびのびの話。あ、あ、ただとっと思ひや、

侍「そっと思ひてくわぬか」

喜「わじな、そっと思えなびかなあ」

「こんな話をしながら歩いてくべし、上松の宿へ着きまわった。

木曾街道膝栗毛(その六)

〜上松宿の旅籠にて〜

上松の宿場へ入る頃、弥次さんは足が痛くなたのが、少しずつ遅れ出しました。

弥「おつい、喜多さんよ、少し待てくれよ。」

喜「どつしたね。足でも痛むのかね」

弥「うむ。歩きづつけた足がどつしても痛み出してかなわない。ま

だ早いが」の宿場へ泊またらどつかな

喜「えっ、ばかばかしい。もう泊まるよ」のが

弥「ね、ね、スキの約束をもっ忘れてるな」

喜「ばい、旦那様」

侍「お主達が泊まりになるなら、俺も一緒にしたい」

弥「そんなら」一緒に泊まりましょ」

どつどつ訳でどの旅籠が良いのかと見立てて歩きました。

やがてふたあらし屋に決め、この旅籠に入りました。

宿の女の人達が盥(たらい)にお湯をくんで来ました。

女「いらっしゃいませ。お早にお着き嬉しゅうございます。」

女「どうぞ、お湯をお使いなれませ」

一緒に泊まるよ」つ侍は、先に足を洗ってちと奥へ歩いていきました。

弥次さんは、上がり口に腰掛けながら、喜多さんの鼻先近くまでぐいすと足を差してしまいました。

弥「じゃ、身ぐもの草鞋を取って足を洗え。

おい、早く洗わんか」

喜「あんまりですよ。」

おめえ自分の足くらい自分で洗いなせえよ」

弥「いつ、主人に向かて不届きなヤツ」

喜「弥次さん、もうよしましょ。ばかばかしい。」

主人だ、家来だ、もわずらわしくてたまらん」

と、言いつつ、弥次さんよりも先にちやちや足を洗うと奥へ行ってしまいました。

弥次さんにもちやちやしながら、一番最後に足を洗って奥へ進みました。

侍「まあまあ、一汁一菜ですよ」

弥「じやあ不思議な縁で、お相宿する事になりました。

何卒宜しくお願い致します。これ、喜多八どついたものだ。ちゃん
と上座へ座たりして不作法じゃないか」

喜「エー。旦那、家来、どうい事はやめたというのに」

弥「うんごじませ。

旅といつものは互いに心置きがなくては悪いと存じて許しておく
家来めがあの通り心やすく致すのは困ります。ははははははは」

先ほどの宿の女が「もし、お湯をおめしなせうませ」と言いつて来ました。

弥次さんは、侍に先にお入り下さい」と勧めました。

侍「わしは草臥くたびれ申した。先に入りますべし」

と、言いつつ、ちやちやお湯へかかりに行きました。

弥「アイタタター。足がめそりに痛むと思つたら、

これ、見あがね。ぶたぶたころがこんなに腫れてきたわ。

なんでも、ギクリとしたように思ったが、引挫いたと見える。こ
りゃあつまらねえ事になってしまった。明日、痛くて歩かれないと大

変だ。これ、い亭主、い亭主」

女「はいはい、何でい亭主さまよいか」

弥「もし、い亭主さまはなにかね」

女「ハイハイ、今の今までわしん所に居ましたが、よびにやりますよう
か」

弥「そりやあ誰を」

女「左官屋さんどいよ」

弥「なにね、壁を塗るのじやねえよ。

俺の足ぐつを塗るのわ」

女「ハイ、ふついに塗る事は上手だと言いますが、

足に塗るのははじめてよいか」

弥「なに、足を塗ったりするものが。」

怪我をしたから「火を焼いておしけるわ」

女「ハイ、そんな「火」ならワシンの所にもありますよ。」

真「赤に焼いてあげますよ。」

弥「エ、真、赤に焼いたら足が焦げてしまっわ」

喜「焦げた方がバリバリしてつまかると。」

みんなが、そんなやりとりをしていくと、ころ入宿内の商人がちてきました。

商「ハイ、ごめんなされまし。ママのお痛み、切り傷、打ち身のお薬はいかがでしょうか。」

弥「じやあ、丁度良いです。」「はい、はい、足を挫きやしたが、なんで膏薬はねえかね。」

商「どれ、お見せなさん。」「はあ、骨がちとこじけいね。」

商人はそう言いつつ、足の甲をそすりそすりして見せたが、そのせいでぎくりと折り曲げの音が出てきました。

弥「ア痛たたたた。」

「これこれそんなに曲げると骨が折れてしまっ」

商「ア、折れていたら継いであげますよ。」

弥「ア痛、ア痛、ア痛。」

商「はとぎと、とつとつ、おと。」

弥「ああ痛え、痛え、痛え。」「これこれ骨が折れる。」

商「折れていたら継いであげますよ。」

弥「折れてたまるものか。」

商「なあ、足の骨の一本や二本ぶち折れたら、たほい、不自由でもあるまじい。そ、これ、良くなりますよ。」

と、言いつつ、打ち身の部分を揉みあげた上、膏薬を貼って治療してくれながら、

商「はとぎ風を当てぬか。」

また冷やせばいいと、なめて下させます。」

…これが、商人の怪我の手当ての終了だった。

弥「そづかい、有り難う。でも、足袋なんてないや」と言っている。入るもつ一人の商人がちてき来た。まるで申し合ひせびもつた。よもひな感じですよ。

商「干、お鼻紙、お煙草、楊枝、齒磨き、

足袋、手ぬぐいなどのご用は、如何ですか」

弥「これこれ、足袋を一足くんなせえ」

商「ぼはは、何文上げましょうか」

弥「十一文と十二文をおくれ」

商「一足ずつでもようか」

弥「いや、片方ずつだ。」

わしの足は片方十一文、もう片方が十二文だ」

商「バアおかしいな。どついでですか」

弥「今日怪我をして片方が腫れ上がりました。」

それで十一文と十二文を一足にした、

足袋がほしいんぢや、」

商「そんな片ちんばな足袋なんかいんじない」

弥「バア、田舎どいつのは不自由だ。」

江戸にはいくらもあるのに、」

喜「なにこない、」

江戸だてそんなばかばかしい足袋なんかあるものか。

仕方がねえ、手拭いででもしぼしておいたらよかるとい、」

どついで訳で、足袋はせめてどついで言葉代だけをばらばらにどつになりました。

二人の商人は、まだ何かを売りつけたい様子でしたが、

宿を出て行きました。

こんなやりとりのあつた後、三人は入れ替わりに風呂を浴びると楽しい夕食になりました。

木曾街道膝栗毛(その七)

〜木曾の棧から福島宿まで〜

弥次さんと喜多さんは、上松の宿を離れました。

しばらくして、行く手の左に御嶽権現のお山が見えてきました。

二人は、お山を伏し拝み一首つくりました。

降積る雪のみたけも諸人の

願いと共に解くる春の日

木曾の棧は、上松と福島の間であり、昔から人馬の通行険しい所でした。

右側は高山連なり、左は岩石鋭くそば立ち、木曾川の流れ逆巻く数丈の深い谷です。

ここへ橋が架けられていますが、昔は藤の蔓をかけ、板を渡した粗末で危険な橋でしたが、近頃は石を積み、橋に欄干を付たので、目の不自由な人や子ども達もたやすくここを通る事が出来るようになりました。人々は、通る度に有り難いお恵みを感じます。

ここには、俳祖松尾芭蕉翁の句「かけはしや命をからむ鳥がずら」が石に彫りつけてありました。

句碑を見て、弥次さんは、

命をもからみつけたる藤葛

今は解け行く春の雪道

と、口ひそみました。

二人は、早くも弥生「といつ立場茶屋に着きました。

この茶屋の名物「わらびもち」を求めて、おいしく頂きました。

そして、また一首できました。

さわらびの握り拳の餅なれば

旅人につちくらわせにけり

二人は福島の宿場に着きました。

この駅(宿場)には全国にその名を知られた「御関所」があります。

とても景色の良い所でした。二人は足を止め、橋の上から眺め渡しまし

た。
そのうちに二人は、橋の欄干に書いてある落書きを見てあめを見つけ眺め入りました。

弥八、書いたわ書いたわ。オ、オ江州臍村穴右衛門・出介同行
二人、この所にて尻の根太ふき切り難儀するゝなんて書いてあ
るわい」

喜「あれあれうちには、江戸御筆筈町引出横町把手屋鐘兵衛、茶
良七、この書を罷り通ると書いてある」

弥「やあやあ、この鐘兵衛という方はとても面倒見の良い人で、同じ
江戸からの旅人でもあり、そんな心やすさから、出合たら路銀
でも借りてやるつもりを。」

い、「この書を通たかー残念な。」

喜「どれどれ、俺もなんぞ落書きを書いてやるつ。」

弥次さん、その矢立(やたて)を貸してくんな」

喜多さんは、その言つと弥次さんの矢立を借りて、何やら無性に落書
きを書き散らし始めました。と、そこへ宿場の役人らしい二三人が通り
かかりました。

その中の上役らしい男は、腰に一本脇差しを決め込んだ見るからに難し
そうな顔をした人です。

役「コヤコヤ、なぜそんな所へ落書きなど致すのか。」

喜「書いて悪いのかへ」

役「知れた。なんだ。やくやく苦労してここへ架けた橋だ。」

「このを何処だと思つ。この悪太郎めが」

喜「オ、オ、これは全部俺が書いたといつものでもない。

こんなにはくらくらも書いてあるのだから、

そんなにはくらくらはあるまい」

役「イヤ、この男は言い訳がましいオソイヤツだ。」

しゅ、捕らえて、くぐりあげてやるつ」

と、声高に言つておどろかす、脇にいた棒を持った役人の家来も尋ねてき
て、

男「落書きしたのみならず、誰でもまちでいるから悪くない」と言い訳ま
でぬかしあがた。こんなヤツは引きまわって行ってお裁きごや。ちよっ
失せおれ」

とつとつ二人して喜多さんを捕らえ、両手を引きまわして行つた。まじ
た。
事の成り行きに驚いたのは弥次さんです。弥次さんはとくに考えがひ
らめきました。

「これは、天下に名高い福島関所の真ん前の事だけに、お裁きごでもな
たら大変なことです。

弥次さんは、とくに喜多さんを自分の方へ抱き寄せました。そしてまじ
めな顔つきで言いました。

弥「あぴら免下せませ。この男めは、たいそう不調法な事を致し
ました。お許し下せませ」

役「いや、うじもそんなうじで許せぬのうじではござん」

弥「許せぬ事ではござん、うじもーうじしめは気がちがひておしま
す。アムン、あの目しきを」

「」

弥次さんは、ひたすら謝りながら、目がおど喜多さんに知らせぬよ、喜
多さんもちよぬぬ、イタンメを言ひ出しました。

喜「ホノキちが、ンノキちがござん」

「」

役「あのほ、うじはちがひかもちねたな」

弥「あの通りでまじ困り者で」

役「エ、いままじ。あのね、乱心者でなければ、このままでは済ま
ねぬのじ。」

「このままでは引キトがな、」

喜「あのじじいが、腹を立てたとかけて、何と解く」

役「エ、まだ何を抜かず」

喜「それは御神酒徳利と解く。その心は口先がとんがた。

「ハハハハ」

役でめえなんか、頭のてしぺんからぶちみしゃぐぞ」

弥「もし、もつご免なすりまし」

と、無理矢理喜多さんを引張り、足早にその場を逃れて関所の方へ向かいました。

しばらくして、役人達が見えなくなるまで、

喜「エエ、もついいじゃないか手を放せ。

いまいい。とごう俺を気遣いにしてしまた」

弥「面倒になるといけないから、お前さんに気遣いになしてもらった。気

違いとは、なかなかの知恵じゃないか。」

そんな事を言いながら歩いていくと、やがて関所に通りがかりました。

福島関所は、木曾街道中の関門と言われる程厳しい所で、

大手橋の向こうに正面を構えた山村氏の代官屋敷からは、

木曾川一つ隔てた町外れの所にありました。

ここでは、「出女・入り鉄砲」として、西より入ってくる鉄砲の輸入と、

東より西へ流れていく女の通行を取り締まりの重点にっていました。

ここに、女の旅は嚴重を極め、髪の毛の長い者はもとより、

そつでないものも比丘尼・髪切り・乙女など区別し、乳房まで探って真

意の程を確かめたという話まで伝えられました。

関所にかかると、西の門から東の門まで一町(約百^{ヤシ}程)の長さで、一方

は急な山林に稀り、一方は木曾川の断崖に臨んだ位置に作られていま

す。

関所には、山村甚兵衛代理格の奉行以下四人の番人その傍にはそれぞれ

れ一人ずつの足軽、門を固める足軽などがいて、ものものしい雰囲気で

す。

調べ所の壁には突き棒、さす又などいかめしい武具が掛けられてあり、急

な場合にはすぐ手にするものが出来るようになっていました。

弥次さんと喜多さんは、階段の下に手を突いて、かねて用意してきた手

形を役人達の前に差し上げるだけで済みました。

二人とも、神妙な顔をして手形を出すと、

役「江戸の町人、御二人」

と、大声で叫び、通行することを許可されました。
二人は、忝として福島関所を後にしました。

木曾街道膝栗毛(その八)

〜宮ノ越宿から数原宿まで〜

やがて二人は、木曾殿(木曾義仲公)の思いの人ときこえた巴・山吹の淵とていつ辺りまで歩いて来ました。

宮ノ越宿のはずれにひっそりと静まり帰る淵です。

木曾殿のはまり賜ひし故にこそ

淵となりたる巴山吹

この宿場を過ぎて、吉田村大木坂にさしかかりました。

この辺では、獣の皮を商う家が多く目につくようになりました。

男熊の皮買って貰おうぜえ。

猿の腹こもり、正信正銘、熊の胆(い)はいりまじまいか

喜弥次さん、この毛皮は温かだろつな

弥どねどね、とてもずぶにんくつてい気持だ。

ああ、死んだかかあの事を思い出した

喜おもしろくもねえ。ア、もつ、これは何だね

主人は、得意そうに説明してくれました。

主「そりゃア、オオカミの頭でいけんよ」

喜「これはなんだえ」

主「それかあ、それはなあ天狗の臍(へそ)」

喜「うちの丸いものは何だろつか」

主「じゃ、やたらとウバには無いものだ。

ウババミの金玉でいけんよ」

喜「あのウババミに金玉があらやすが」

主「あはあはあはあ。このお宝はこれだよいけんよ」

でかいは八畳敷きもあるとこいけんだよ」

喜「なになに、狸とまぢがていけんよ」

主「その筈も筈。狸が年を取るとウババミになる」

喜「なにとんだ事を申すか」

主「あは、うわはははあ、とつた証拠があるよ」

よく人が狸を当ウウという事がある。

あれは、狸めが坊主に化けるもので

その化けたとき何といふと思おせぬ」

喜「何と言つのかな」

主「その化け時、ウフバミ嘆仏と言つげな」

喜「悪くしゃねるわ。そあ行きぢやないし」

そんなやりとりがあって、藪原の宿に着きました。

木曾街道膝栗毛(その九)

〜数原宿から鳥居峠まで〜

宿場の所々には、名物のお六櫛」を売る店が目につくようになった。両側の茶屋からは呼び声がしきりです。

女休んで呉りませ」

女「木曾の名物『お六櫛』 買って呉りませ」

喜多さんの「ういで」服いたしやめし」と声は、

弥次さんも誘われて茶屋へ入って休む事になりました。

店の亭主から女将からみんな出てきて応対です。

亭「お早いお着きです。ゆくりお休み下さい。

あなた方お土産に桜皮の短冊、

墨流しの短冊を買ってお行きなせう」

弥「うりゃ木をへいだ短冊だな。

俺はまた経木かと思つた」

女「お六くし、みづくし、すきべん、うんぬん呉りませ。

お一つ如何ですか」

喜「魚串はねえか」

女「バイ、この魚づくしの模様のついたのですか」

喜「う、魚を焼くに頭からそれ尻の方へ、

ぐらと突き刺す串の事だ」

女「バイ、尻へおさしになる櫛は呉りませんでな、

喜ばかばかしいなんのクシの事だがさ、ぱりわからん。

人が串と言えば櫛とさ。

一体なんのクシなんだ」

ななう、ういしやうん、

年の頃四十に近い尼さんが話しに割て入りました。

木綿合羽の上から高ばし、うい、

風呂敷包みを背負っています。

さきからこの茶屋で休んでいましたが、

櫛に興味があるじいへ、女将に声をかけました。

尼「モジ、その赤い櫛はおじいへですか」

女「うわかな、うちは六十四文に一つあがも中か、」

尼「でもよび櫛ですわね。」

でもあんまり大きくて髪にはおれおれいなりですわね。

そのうちの櫛はおじいへですか。

女「うん、それを買いますか、」

女「おじいへのおじいへのおじいへ、」

尼「それもほじり。買いますか、」

女「うわかのじい」

尼「この櫛、いひがそすには具合悪くないか、

見て下さいませ」

弥「オヤ、お前さん、土産に買いたくなるのかと思たら、

お前さんがおじいへさんだね、」

尼「おじいへさん、」

弥「ハハハハ、お前さん。頭に髪もなくって、」

尼「ほんにそうじゃけ。」

私は頭に髪の毛がない事をすっかり忘れてた。

もう櫛はいらなげなむ、

やくやく買おして見立てたもの。

お寺の長老様に「おれ、」

弥「お長老様も坊様だるうが、」

尼「ほんにそうじゃけ、」

喜「思い出してもみなせえ。坊様に違いあるめえ。」

そしてお長老様なら男だるうが、」

尼「それぞれ、お長老様は男で坊主頭だたのじい。」

おれ、おれ、おれ、」

弥「そんなら、そのお長老様のお大黒へ、

土産にうけなむがよかぬじい、」

尼「ええ。そのお大黒は、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、」

喜「あははははー」じいほで来た。

ちよ、もっ出かけやじよっ」

こんなやりとりをしながら、二人は笑いながらこの宿を発つと、その尼さんも二人の後を歩いて歩いてきました。

しばらく行くと、後から大声を上げて追いかけてくる者がありました。

振り返ってみると、今休んだ茶屋の亭主が、血相を変え、

汗を振り乱して、追いつくなり、かの尼さんをひ捕らえて怒鳴りました。

亭「じや、坊主め。

お前さん顔に似合わずおぞい事をしなやめ。

今の櫛を出せ」

尼「何を言う。櫛を出せとはなんの事だのし」

亭「ええい。しばらくくれるのか。店の櫛が三枚も足りない。

お前が持って来たのだらう。」

尼「何て事を言われるのか。

この人は、わしにゆかけてくるわい。

わしは何も知らん。

あてこともない事を言う人だ。」

亭「やいやい、いい加減にしねえか。

柔らかく言う内に「出せなごう、

むじり目にあつのはお前なんだぜ。

エー。肝が煮えくりかえる。

この盗人坊主め」

尼「おいら、何時盗んだ」

亭「何をしらぬらう。」

この欲たれめが」

と、亭主は尼さんと同じかみかかりました。

尼さんもちよとじや、むじり目にあつのはお前なんだぜ。はげごじかみあごじや、むじり目にあつのはお前なんだぜ。待ちなせえ。」と、二人の

じいほを見た喜さんだが、「じいほお待ちなせえ。待ちなせえ。」と、二人の

中へ入っている取り押さえようとしています。二人は聞かずに互いになおもねじあつ始末です。

あちこち宿(なだ)める拍子に、「ふと喜多八の懐から紙に包んだ」みじくしがパタリと落ちました。

それを見た尼さんは、大声で言いました。

尼「ほら、いざなれ。」

うぢやないやありませんか。あの人だ」

亭「これだ。これだ。でもまだ一つなぞ。」

と、言いつつ、喜多八の懐へずつと手を突込み

もつ一枚あるのを取って引き出しました。

亭「お主が盗んだのだな」

喜「俺の懐にあたのかい。」

そつだつじや、面目もねえ。

しかし、俺も取らねえ。

大方その櫛が俺の懐に飛び込んだのである。」

尼「おぞい人だ。」

「あなたのお陰で、わたしゃひび目にあてしまった」

亭「尼さん、堪忍なせえ。」

「この野郎がひび目ヤシだからだ。」

「エネ、盗人めが」

喜多八は、すっかりしよげがもつて、

面目なもんしな表情です。

「じぶがバシつしまたおがこつ。」

弥次さんは笑いながら言いました。

弥「ハハハハ。外聞の悪い男だ。」

たかが四十文か五十文の品物を、

「この間に懐へ入れたものやら。」

泥棒根性のあるものは如才ないものだ」

喜「いまいっ。」

「ちよつとしゃねにせうかした事に足がついてしまった。」

ほんと、お比丘尼様にはお気の毒な事をしました。」

茶屋の亭主は、櫛が戻ったのに気をよくして機嫌も直り、
藪原宿の方へ帰って行きました。

三人も、峠を目指して急ぎました。

その時、尼さんが後ろを振り返りながら言いました。

尼やれやれたまげな。

危ない事よのし。

わしが取ってきたのを見て、

あの亭主が怒り出したと思ったのに、

あなたに災難が降りかかりました。

これを見てください。

私は、これを取って来ました」

と、懐から櫛二枚をそと出して見せました。

それを見た弥次さんと喜多さんは本当にびっくりしてしまいました。

喜「ゴッソ」。

お前さんもそれを盗んできてたのか。

おいらばかりに恥をかかせたよは。

おおい、この比丘尼殿も櫛を二枚取たぞうよ」

尼やれやれ、これは早く逃げるに限ります。

「いめんなやーこ」

と、一目散に駆けだして行きました。

それを見ていた弥次さんがしみじみ言いました。

弥「出来心いしよん、

そんな事をするから逃げて行かなくちゃならんのだ。

俺たちは、金輪際人の物に手などかけずに

ゆくり行きましょや」

喜多さんは、赤くなつて頭をかきかきしながらうなずくと

峠をわづり歩き出しました。

木曾街道膝栗毛(その十一)

～鳥居峠を越して奈良井宿にて～

やがて、二人が鳥居峠に向けて急な坂道にさしかけた時でした。奈良井の宿と藪原の宿を行き来している「山駕籠」に行き会いました。中山道最高の難所として有名な鳥居峠を行き来する駕籠ですから、簡単なつくりの、いたって小さなものでした。

ホイサ、ヤレサ。ホイサ、ヤレサ。」

駕籠屋の二人は、かけ声も元気に弥次・喜多の二人を追い抜いたところで、「立ち一服するかあ」「あいよ」と声を掛け合いつつ、駕籠を勝手に道はたへ下ると、二人とも汗をふいて大きな息をしています。

すると、駕籠に乗った男が、

「休んではかりいちゃあ、奈良井へ着くのは夜になってしまっせ」と、不満そうに言いました。

見ると、二人の駕籠屋がよく休むのも尤(もと)もです。

駕籠に乗っている男はお相撲さんのような大男でした。

駕籠からはみ出してしまっばい(ばい)の男です。

これを見た弥次さんは早速一首そらんじました。

旅人はそぞ窮屈に思いつらん

乗りたる駕籠の鳥居峠は

かくして、鳥居峠を越え奈良井の宿場へ二人が着いたのは、もう日が西の山に傾きかけて、日暮れ時がせまていました。径の両側の旅籠からは、泊まり客をひく女達が出てきて、二人に声をかけました。

女「モシモシ、お泊まりじゃいせんしなにか。お風呂もわいております

に、なめえあ、お泊まりお泊まり」

喜「まだ少し早いよしな気がするが、どしどし」

弥「もう泊まってもよからう。なあ、お姉さん」

女「お泊まりなわこっ」。

お夜食は「飯でもお蕎麦でも何でもございませう。お安へございませう

ますので、お泊まりなさい。」

弥「かほごでも安い方がよい。」

蕎麦を夕飯にしていくらで泊めてくれるかな。」

女「ハイ、お蕎麦の夕飯ならば百十六文でございます。」

弥「そんなら」で泊まると致しやしませんか。」

女「有り難うございます。」

と、いふ事で二人は奥の座敷へ上がって行きました。

女「すぐにお風呂へお入り下さいませ。」

の、声に二人は疲れた体を風呂で癒す事にしました。

やがて、ふろから上がると、女は夕食の蕎麦を持って来ました。

喜「うちの方では、蕎麦の味はよいが、汁の味が悪いので、

閉口してしまふ。」

弥「そのかわりお給仕が美しい方だから良いのう。」

ねえ、お姉さん。もう一杯くんねえ。」

女「お蕎麦は、それぐらいでございます。」

弥「もうもつねえのかえ。」

ちた「一膳ずつ食っただけじゃつまらねえ。」

「これじゃ食ひ足りないうし。」

喜「道理で旅籠賃が安いと思つたよ。」

「一杯ばかりの蕎麦でござらねるものかい。」

弥「こんな事なら、

最初に蕎麦なら一杯と言つてくれりゃ良かったものを。」

馬鹿なことだ。銭はだすから飯をくんねえ。」

女「ハイ、そんなら」飯のお膳を出しやしませんか。」

喜「なんのらた。やっぱり泊まり賃が高くつくとはいかないか。」

と、小言を言つ内にお膳が出て、今度こそ飯の夕飯です。

二人が夕飯をすませる頃、

女は宿帳をつけてくれと持つてきました。

弥「おぼやかし、おぼやかしの名前をひけるのだな。」

と、宿帳を見ていた弥次さんが、突然大声を出しました。

弥やあやあ喜多八、とんだ珍しい事もあるものだ。

きまよ福島でお前がしくじったあの橋の欄干に書いてあった、ソレ、
おいらが心やすいと言った男の名前が、

この宿帳に書いてあるぜ」

喜「本当だ。江戸御筆笥町引出横町、把手屋鐘兵衛上下二人とある。」

ははあ、二人はこの旅籠へ泊まったとみえる」

弥「この人に会うことができれば、路銀を借りることも出来るものを。」

これこれ、女中さんよ。

「ここに江戸のお方はどこへお泊まりなされたね」

女「そのお方なら、あなた方より少し前」

「ここへお入りになりました」

弥「はあ、そんなら今この宿帳へ書いたのだな。」

「どうもおもいわね。」

「これ女中、このお方はこの部屋においでです。」

女「お隣のお座敷でございますよ」

弥「いやはや、奇妙奇妙」

と言ながらもまたちまちまち弥次さんの気が弾み

早速立ち隣座敷の唐紙の隙間から覗いてみれば

把手屋鐘兵衛に間違いありません。

二人とはかねてより親しくしている間柄だったので

すぐに唐紙「叩」叩免下と「と」声をかけました。

一方、こちらの部屋では、隣の部屋から声が出たかと思つて、二人の男
がずかずかとひひと来たので

鐘兵衛さんは驚きました。

そして二人の男の顔を見てもとびくりました。

驚いている鐘兵衛さんに向かい、弥次さんは声をかけました。

弥「鐘兵衛様、とんだ所でお目にかかりやす」

鐘「やあ、誰かと思つたらこれは弥次郎兵衛殿か。」

道理でさつきから聞いた事のある声だと思つたよ。

貴方が伊勢神宮にお参りしたという事は聞いていたが、まさかここで逢おうとは思いませんな。

そして貴方のお連れはどなたさまね。」

弥「存じの居候、喜多八めじりやす。」

鐘「ぞうぞう、貴方にはお連れがいらした。」

弥「まあまあ、鐘兵衛様も」機嫌宜しくおめでたい事にじります。

いい所でお目にかかりました。」

私どもは、金比羅様から、安芸の宮島を回りましたので、誠になけなしのふじんをかまぼくし、しみたれた旅を続けております。」

と「じぶんも路銀の無心を言ひつもりでした。」

が、それと見て取った鐘兵衛は、二人の財布の軽いことは先刻承知とばかり、小判を五六枚ぼんと投げだしました。

思いがけなく大金を手にする事になった弥次さんは恐縮しながら言いました。

弥「これはこれは、有り難い致します。

」いや喜多八お陰でこれからは安心だ。

旦那にお礼を言ひが良ござん。」

喜「引出横町の旦那様、有り難い致します。」

鐘「なんだい喜多八よ、みずくさ。

貴方もこちら入りなさいよ。

そっちは一杯どつかな。

」この地酒はじまじぞ。まあ、飲んどくわな。」

喜「鐘兵衛様有り難い致します。」

二人は、路銀を貸して貰った上、

お酒を戴いてすかり」機嫌になりました。

木曾街道膝栗毛(その十一)

〜奈良井宿「能楽寺」の事〜

二人は、鐘兵衛さんにお酒を勧められると、すっかり機嫌でした。旅の楽しいことや失敗談に花が咲きました。

鐘兵衛さんは、「ここ」しながらお酒を勧めていましたが、面白い話を始めました。

鐘「ところで、お一人さんよ、奈良井宿は楽しい所です。

」この能楽寺といつお寺の住職さんは、ワジが国の者で懐かしいから、先ほど使いの者をちたら是非遊びに来るよつたといつ返事じゃった。

どうだろう、一緒に参らぬか。

なんでも山の中で馳走は出来ぬが、

鹿の鳴く声を聞かせてくれるといつ事だ。

一緒に参らぬか。

弥「そりゃあ珍しい。」

喜「旅のみやげに是非お願いします」

その時、宿の女の「寺からお迎えが参りました」の声。

鐘兵衛は、二人を連れて十町ばかりの道のりを行くと

能楽寺が見えて来ました。

寺の門には和尚が三人を迎えてくれました。

和尚は「ここ」が、

和「これは、なほ、よへやあつてんだらう。

なほやあ、奥へいって、

と、気軽に奥座敷へ案内してくれました。

鐘兵衛と和尚のあいさが終わると、

二人も和尚へ改めてあいさつをしました。

弥「私も、このお旦那はお懇(ねん)んじつてる者で、いれま
す。

不思議な事に今晚奈良井の旅籠で泊まりあわせをする事に

なりました。

今、お珍しいお話をお聞きして、お供して参りました。

ところで和尚様、鹿といつものは今まで秋に鳴くものと聞いていましたが、今頃でもでも鳴きなますかね」

和「さて、その事ですがね、秋に鳴くものを今頃お聞かせ申すのがこ

馳走ですわね。

こんな事は外には言いませんぞ。

わしが所の山に居る鹿は、奇妙にも毎晩、鼻の先で鳴くのどういいます。」

喜「そりゃ、何よりの土産話になります。

早く、耳にしたいものです。」

和「まずまず、その前にお酒をあげまよう。

「じいじや西念よ、お酒の盃を持って参れ」

和尚さんが手を叩きますと、西念と呼ばれた小僧が酒や肴を運んできて宴会が始まりました。

すきから酒の飲み続けで、弥次・喜多の二人も、すっかりご機嫌になり盃を重ねました。

みんな賑やかにお酒を戴きました。

小僧の西念がちて来ました。

西「もし、和尚様。ただいま荒畑の間平殿が参りました」

和「ちよとウキム呼びなれど。

何の用事で来られたかを聞きなれど。」

西「雨がちよとピンピンして傘を貸してくねと言われたから、貸してやりました」

和「のダボ小僧め。

傘といつものはな、人に貸せるものではないわ。

今度から人が借りに来たときはこう言っのだ。

お生憎様(あてにくれませぬ)です。

「この間の強し雨の日にこれ出して田た

骨と紙とがバババです。」

あれでは役に立ちません。

気の毒な事でござります。

と、断りを言つてもんだぞ。

そのように心得て居ね。どんぐらさんじゃ。

これじゃ、お酒がなごぞ。

鐘いやもう沢山戴きました」

和「そんなと言わず、ゆくり召し上がて下せ。

そのうちに鹿が鳴く事でござりますよ。

これじゃ、西念、また誰ぞ来たよごじゃな」

西「はい、門前の茂弟次が来ました」

和「そうか、でどんな用事で来たのか」

西「あした、村の道普請があるので

馬を貸してくれと言つて来ました」

和「お前は、何と言つた」

西「さき和尚さんにきつく叱られたので断つてやりました。馬は貸し

てやれない事はないけれど、この間、強い雨が降つて、馬の骨は骨、

肉はハフハフです。

あれではお役に立ちません。

誠にお気の毒でござります、と言つて断つてやりました」

和「ハイハイ、くそたれ小僧め。

馬が強い雨の中歩いてちて、骨と肉とハフハフになんかなるものか。

それは傘の話じゃ。

茂弟次はさぞかしびくりしたことだらうよ。

今度から、馬を貸してくれと言われたら、いい言ひのだ。

実は、草を付けに行たら、細い径から馬が転がり落ちて怪我を

して役に立たない。

ああ気の毒なごんだ、と、断りを言つてもんだぞ。

わかたか。」

西「はいは。

今度から人が来たら、

和尚様の言ひとおりにお答え致します。」

和「やれやれ、わしが出ないといふんだ目にあてしまふ。

本当に神経の要る事ですよ。」

おや、また誰か来た。今夜に限ってよく人が来るな。

西念、西念はおらぬか」

西「はい。」

また、矢村の辺呂八殿から、使いの人が来ました」

和「辺呂八から何と云うて来たのじゃ」

西「明日は、日頃お世話になっている和尚様をお呼びして、

村の人達がお礼を言いたい。是非お出で下さい、

といふ事でした」

和「おつ、そつか、そつか。」

そつや是非行かなくなるとなるまじ」

西「いや、そのつ、断りを言つてやりました」

和「なに、この和尚にも聞かずに、

どつして行けないと断つたのじゃ」

西「和尚さんは、昨日馬に草を付けに行つたら

細い径から馬も和尚さんも転がり落ちて

役に立たなくなつた。

ああ気の毒なつんだと、断つてやりました」

和「この大馬鹿者め。」

いじつになつたらわしの言ひつゝがわかるのじゃ」

西「おちば、馬も和尚さんも同じつんだと思つたから、

そつ答えました」

和「どつして、わしと馬が同じ事なんだ」

西「人様は和尚さんのつゝを、

馬のつゝに瘦せた貧僧だと言ひますわい」

和「なにを気狂つた事ばかり抜かし上がる。

この馬鹿たねめが」

和尚さん、いじつ本氣になつて怒つて出しました。

そして、キヤルで西念の頭を「んてんてん」と叩きまわった。西念とていふ小僧は、ききょうとていふので、素早く逃げた。「んやんやんのど、和尚をたすすく後を追いかけてみよじまわった。

弥「まあまあ和尚様、ようございませんか。

とていふ寺でも小僧達には世話が焼けるものだ。」

和「俺に何度恥をかかせたら済むんだ。

「このむたらく者のめが」

鐘 「まあいじやないですか。

そりがちやまのでいれごます。

何とが許してあげてくれ。

私もは、お酒を大変に載て

すかり酔ってしまった。

鹿の鳴き声は、まだでこもこか」

和ほんに、すかりなれしてしまった。

もう、ほんのこですから、今こぼらくお待ち下せ。

今にも鳴く「うわいごもい」

さすがの和尚も、いよいよ座してはなれなうと「んらんの、そんやんやん」と行きまわった。

こぼらくするとい、お勝手の方から、騒がしい声が出て、誰が大声で怒っているように感じた。

座敷にすわっている三人も、

一体何が起ったのかと互いに耳を傾けました。

でも、何だかおぼろしくわかります。

どしたのかとい、心配して「んやんやん」

和尚さんが怒ったような硬い表情をして房へきました。

和「いつも今夜は、いこうと寺に取り込みが、ございまして申し訳ない、

と、両手をしてお詫びの挨拶をはじめました。ちやうど、その和尚を追いついて、大きな目の男がやめて来て、泣き声で言いました。

男 和尚様、和尚様にあんなにひどいぶたなわちや、

わしにはまじり何も出来なさいよ」

和「これこれ、これはお客様が居られる。

これから早く出ていかないと。」

おい、お勝手にしている者ども、

早く権十をひき返して行け」

権「いえ。わしはこれ動きません。

和尚にあんなに殴られてまで、

声色(こわいら)なんてできませんか」

と、こちらもももの凄じ剣幕で和尚にぶつてかかるとしてするので、座敷に

た二人は権十という男をなだめにかかりました。

鐘「これこれ、権十殿と言われるが。

静かになせえ。そんなに騒がずともわかることだろつ。

一体どいつたことか訳を話してみなそれ」

権「これはこれはお客様。どいつか聞いて下され」

和「いや、何を言ひ出すかわかたもんじゃない。

これはいすぐに酒に飲まわってしまっ奴で、

今夜もしたたか飲んで、酔っぱらっているんです。

ちや、どいすぐもつとつ消えて失せたらどうだ」

鐘「まあまあ、和尚様もそんなに興奮しなそんな。

一体どいつたのだ」

和「いや、訳なんか何にもない。

これいがかただい酔っぱらっているだけの事なんです。

まったく問題になりません」

権「それでも、訳を言わなくちゃ何にも分かりはしません。

お客様、どいつか聞いて下されいませ。

わしはこの村の権十という者だが、鹿の声色をひくするものだが

ら、和尚にやめてくれと頼まれました。

わしははははめそのしもついでにただいばい

夕方から近くの男どもとやたら酒をのんでいて、

それで、もついでになくちやあつた。

そしたら昔のばあさまは、俺をやたら殴るし、和尚までかまして、ぶんだだきやうしわけなぞです。」

鐘「ハハハハ」。

そんなら、鹿が鳴くやうなのは本当の鹿ではなくて、あなたの声色を聞かせるやうに嬉しう事だ、たんですね。」

和「いや、や、面目次第も、うれませぬ。」

鐘「いや、や、これは山の中ならどけの面白うお話じゃ。」

和尚様の心遣いはほんとに嬉しう思いました。

もしよるしかならう、お前さんも「機嫌直しに一杯飲み直しましよ
う」

弥「これはおもしろい。」

まあ、山の中の鹿先生、盃をお持ちしてくれ。」

権「おらあ、夕方から飲んでいて、もう腹一杯だが、

折角だ、いただきやせよう。」

鐘「今夜の酒代は全部引き受けました。」

思ひきり飲んでくれ。」

権「ちかくお客様がおどろいた。」

「うぐっし酒の肴に鹿の鳴き声をせめてみまよう。」

弥「じや嬉しう。是非やしてくれ。」

権「やお聞きくださいませ。」

「トホトホトホトホトホトホト」。

「これは鹿が酔い、ふたたび、うぐっしや。」

ハハハハハ」

鐘「やあ、お見事お見事。」

わしも東海道から京へ、京からいらさうとあちらこちら歩いてきました
が、鹿の声色やうなのは初めて聞きました。

和尚様、これをばねにせうとま致しましよん。」

「馳走様でした。」

和「もつゆへくうくとくれ。」

喜「ハハハハ」。

鹿殿が「こ」に倒れてしまった。

わしも鹿のいびきを初めて聞きましたが、

豪快ないびきですな。」

弥「和尚様大きに」馳走になりました。」

和「ゆくりなすて下さい。わしは、穴があたら入りたいような恥

ずかしめで一杯です。」

と、話してゐるうちに、権十といふ男はすっかりお酒が回って、

横になつた途端大いびきをかいて眠つてしまいました。

和尚さんは、大まじめな顔で本当に申し訳ない事をしたと

挨拶されました。

でも、三人はじつとおかしさを「ら」えて能楽寺を後にしました。

旅籠へ帰ると、弥次さん喜多さんの二人は、

楽しかた一夜のことを夢に結んでぐすり眠りました。

木曾街道膝栗毛(その十一)

〜奈良井宿から贄川宿まで〜

一夜明けると、弥次さんと喜多さんは、鐘兵衛老人においともいをして、一足先へ急ぐ事になりました。それにしても、ゆづべの楽しかった事とらたらありませんでした。また、ひっそりとした山の中の宿場町は、二人にとって気持ちの休まる所でもありました。

弥次さんは、出がけに一首詠みました。

権十は鹿なり和尚馬なねば

そと馬鹿らしきもてなじにん

今までは持っている路銀が少なくて、何事をするにも心配ばかりでしたが、鐘兵衛老人に貸して頂いたお陰で、今朝は心も勇み足元も軽ろやかに旅が出来そうでした。

二人は、諏訪坂を越えて贄川の宿場へ急ぎました。

行く手に広がる松本平の空には、白い雲がぽかり浮かんで今日も気持ちの良い旅日になりそうでした。

金借りて暖りたる懐は

お臍も笑つお茶の贄川

二人は、この宿場の棒鼻茶屋に休もつとつて、

ある一軒に入りました。女将さんが出てきました。

女「お早いづいきましたね」

弥「女将さん、今何ぞきだね」

女「まだ四つ(四)の刻・午前十時頃」にはなりました」

と話しているうちに、この家の主人らしい男が外から帰ってきました。

主「じゃ、よへおごどくせにました。

ちあつあ、お茶をいひや。

とにんが女将をいひや、

あの尾垂の与太者めはまだ見えんかいな」

女「いえ、まだごせんしなひよ」

主「昨日の内に鯉を持ってきてくれと言っておいたのに、ハイ、と請け合っておきながら、未だに来ておらん。あいつめは、何をちやても間に合つた事がない。全くおぞい奴だ」

と、何か一人で小言を言っているうちに、表から二十四五の男がワラジがけでスカズカ入り込んで来ました。

来るなり、大声で「おさま、今来ました」と告げました。

女「丹太殿が、よく来て下さつた」

丹「よく来たといふ程でもない。わしは、言訳に来たといふじや。

鯉の事、頼まれましたがのう、それがこの間から取れないので困てしまつたが、わざわざ頼まれた事だから、

どうせすと困つてそつと探し、ずかい奴を一本買つて背戸の川へ入れておきました。

ちゃんと川の杭にうないらたのに、今朝見たらどうもたと思ひます。

まあ、聞いて下れな。

河童めが鯉の横腹に食いついてあだから、

わしゃ、あたまげてみくりかゝてしまつた。

そつて、こりや傷の付いたものだ、祝い事には使われまいと思つて持つてくる気にもなれなかつた。

でも、その断りにはどうしても来なくちゃいけなまつたので、こりやつて、ちやくちやくして来た」

主「エ、そつなつてしまつた事は仕様がな。

普通の男ならそんな時には来ないもんだが、

お前は律儀な男だ。

昨日のお客には、もつた肴で済ませたからもつてええよ。ちやくちやく来てくれたから、

何もないが、一し酒でも飲んでくわえ、」

丹「そりやかたごひのいけん。

が、わしも実は飲んで来た。」不用にせめて下せえな」

主「そう言わずに、まあ上がれ」

丹「そんなら少し上がらせてもらわず」

主「お前の所からの鯉はないが、

塩尻の祖父さまから今朝鯉を一本もらった。

お前は良い所へ来た。

あの鯉を煮て食べせず。珍しいんだ。

お前と飲めるのはな。

さっきの事は気にかけずに、

今日はゆくりと、飲め飲め。」

丹「おら、鯉といえば煮たのが好きだ」

主「そんなら、名古屋味噌でトマト煮て、

山椒をかけて食うとするが。

酒はたんと飲んでくれや」

丹「わしは、今朝飲んで下地があるから、

そしは飲めまじない」

主「ぼては酒とじしものな

人に強いられないとじしも飲めないものだて。

是非飲んで行っておくれや」

丹「そんな言わぬせぬのなら、よばわじかす」

主「飲む気になたか。そじゃ嬉しい。

では、片身でトマトを焼いて、トマトで醤油でやう。

なんと良い酒の肴になる」

丹「そじゃ豪華で良い肴だわ」

主「そんなら、それを肴にして

もう五杯ばかり飲んでトマト」

丹「え、そしは難しい。そんなに飲めまじない」

主「じしもの時は、そしは言わなご。

今日はあんなだけ全部飲んでまじしよ」

丹「そんなら飲みまじし」

主「うわい。い。い。酒の上では茶もまた良いものだ。15分間、

信楽の良いお茶を買った。

そいつを山吹色に出鼻にして飲ませよう」

丹「そりゃ、重ね重ねお手数をかけます」

主「だからお前が帰るとき、

いろいろな造作を褒めてはいてもうたい」

丹「褒めますとも。きつ」

主「そこでお前よ、はじめに酒五杯とまた後で五杯。

十杯も飲んだから、いかなお前でも酔ってきて、

舌も回らなくなると、

足元も『ロー』『ロー』になる事だろっ。

一人でワラジも履くことが出来まじ。

そつなたらおらが履かせてやんぜ」

丹「なに、めそつもない。わしが自分で履く」

主「おらが履かせず」

丹「ア、もしも、それでも自分で履く履く」

主「お、履けたな。履けたらそつで褒めるのだ。」

さてさてさて、今日は結構なお酒と申し、お肴と申し、その上結

構なお茶まで下つわわって、造作になりました。

かたじけのないお礼を言われるほどに馳走してやりたいが、ま

あ、そつならなにとろるが憂世々。

お前の鯉を河童がやんぜ、

おらの鯉をイタチがくろってしまたから、仕方がない。

もうよいよい。早くお帰りよ。ワハハハハ」。

丹「ア」。伯父さま。申し訳ない事をしてしまた。

どうか、どうかお許しを」

主「ワハハハハハ」。

二人のお客様よ。

こいつはワシの甥ですが、いつも口先ばかりで、

人をか転ばすことが得手だもんだから、

わしも口先で馳走しながら道を説いたよつな訳でして。

「へへへへへえー。」

弥「ハハハハハ。こりゃこりゃ愉快なお話でした。

あんまり面白かったから、

江戸へのお土産にするつもりでした。

そのかわり、おかげでこりゃら腹が減ってまいりました。

こりゃで、私ももお土産にしまよう。」

喜「それがいい。おいしいお昼が食いたいな。」

二人はそう言いつつ、今のお話を思い出したのが大笑いしながら、往還を足取りも軽く歩いて行きました。

(「木曾街道膝栗毛」木曾路の巻終わり)